

牛乳・乳製品



◆飼養動向

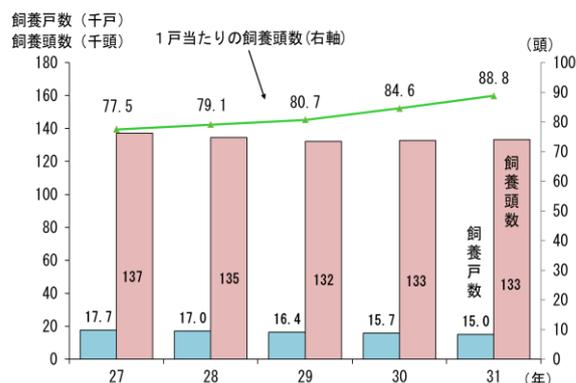
31年2月時点の乳用牛飼養頭数、0.3%増

乳用牛の飼養戸数は、酪農家の高齢化や後継者不足などによる離農の進行から、平成31年は、前年を700戸下回る1万5000戸（前年比4.5%減）とやや減少した。

こうした中で飼養頭数は、性判別精液の活用などによる後継牛確保の取組の進展などから31年は前年比4000頭増の133万2000頭（同0.3%増）と、2年連続で増加とした。

この結果、同年の1戸当たり飼養頭数は、前年を4.2頭上回る88.8頭（同5.0%増）となった（図1）。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在。なお、31年は概算値。

◆生乳生産量

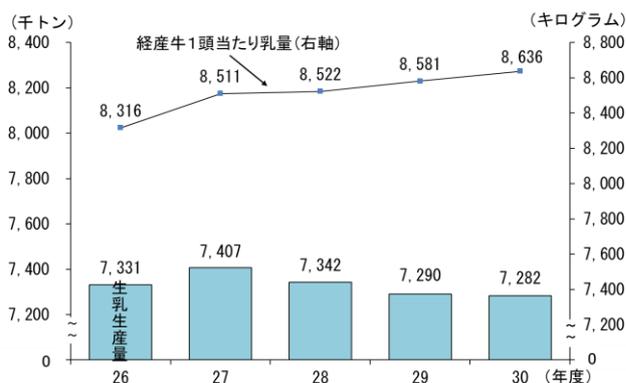
30年度の生乳生産量、前年度並み

生乳生産量は、都府県での離農などによる生産減から、平成8年度の約870万トン进行ピークに、おおむね減少傾向で推移してきた。

30年度の全国が生乳生産量は、飼養頭数の減少や9月に発生した北海道胆振東部地震の影響などを背景に728万2275トン（前年度比0.1%減）と前年度並みとなった。

一方、経産牛1頭当たり乳量を見ると、30年度は8636キログラム（同0.6%増）と8年連続で増加した（図2）。

図2 生乳生産量・経産牛1頭当たり乳量（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」
注：30年度の経産牛1頭当たり乳量は概算値。

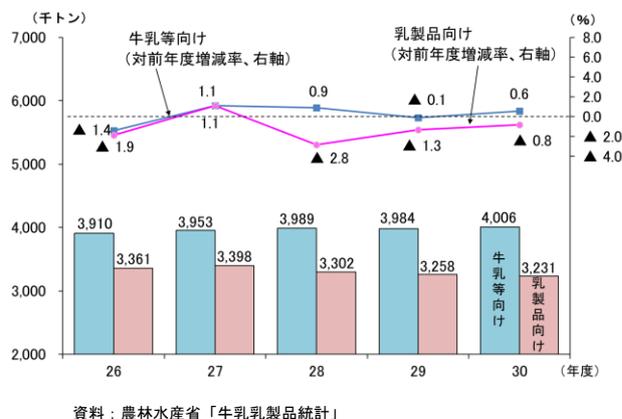
◆牛乳等向け処理量

30年度の牛乳等向け処理量、0.6%増

平成30年度の生乳の仕向け割合を見ると、消費者の健康志向の高まりなどから牛乳の価値が見直され、消費が堅調に推移したことなどから、牛乳等向けは400万6025トン（前年度比0.6%減）と前年度並みとなった（図3）。

また、30年度の国内生産量に占める牛乳等向け処理量の割合（市乳化率）は55.0%と、前年度より0.4ポイント上昇した。

図3 用途別処理量



◆乳製品向け処理量

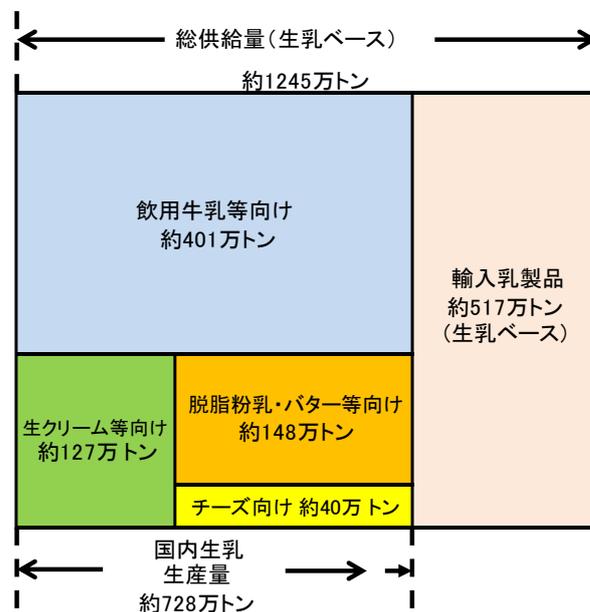
30年度の乳製品向け処理量、0.8%減

近年、生乳生産量が減少傾向で推移する中、牛乳等向けは需要が堅調に推移し、また、乳製品向けのうち、生クリームなどの液状乳製品向けが順調に拡大していることから、脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量は減少傾向で推移している。

平成30年度は、前年度に引き続き、都府県の生乳生産量の減少に加え、健康志向などを背景に牛乳等向け処理量が前年度並みとなったことから、乳製品向け処理量は323万1175トン（前年度比0.8%減）と3年連続で減少した（図3）。30年度の乳製品向け処理量のうち、脱脂粉乳・バター等向けは約148万トン、生クリーム等向けは約127万トン、チーズ向けは約40万トンとなった。

同年度の総供給量は、国内生乳生産約728万トン、輸入乳製品（生乳ベース）約517万トンを合わせた約1245万トンとなった（図4）。

図4 生乳の需給構造の概要（30年度）



資料：農林水産省「畜産をめぐる情勢」
 注1：四捨五入の関係で、必ずしも計が文中の数字と一致しない。
 2：国内生乳生産量の中には、このほか、他の用途向け（約8万トン）の生乳がある。
 3：生クリーム等向けは、生クリーム・脱脂濃縮乳・濃縮乳に仕向けられたものをいう。

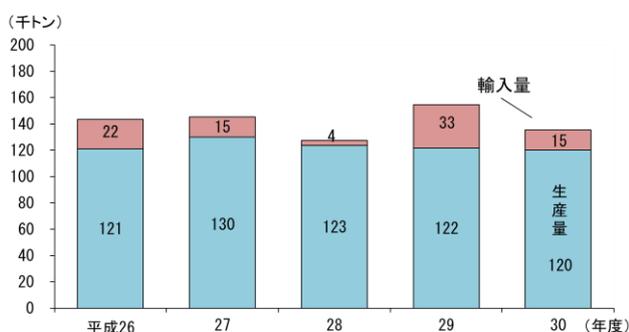
◆ 脱脂粉乳

30年度の期末在庫量は2.0%減、大口需要者価格は0.2%高

平成30年度の脱脂粉乳の生産量は、生乳生産量の減少や堅調な牛乳等向け需要などを背景に、脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量が減少したことなどから、12万65トン（前年度比1.2%減）と3年連続で減少した。

同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、高い在庫水準の下で、それまで堅調だったヨーグルトなどはっ酵乳の需要が頭打ちとなったことなどから、1万5277トン（同54.0%減）と大幅に減少した（図5）。

図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量

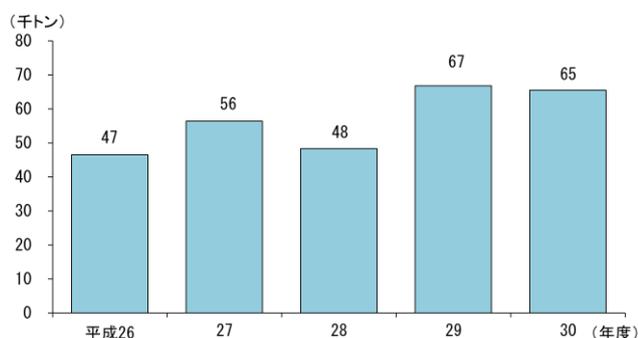


資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：輸入量は機構輸入分のみ。

同年度の推定出回り量は、はっ酵乳需要の伸びが停滞したことなどを背景に、13万7377トン（同1.1%減）とわずかに減少した。

この結果、同年度の民間期末在庫量は、6万5449トン（同2.0%減）とわずかに減少した（図6）。

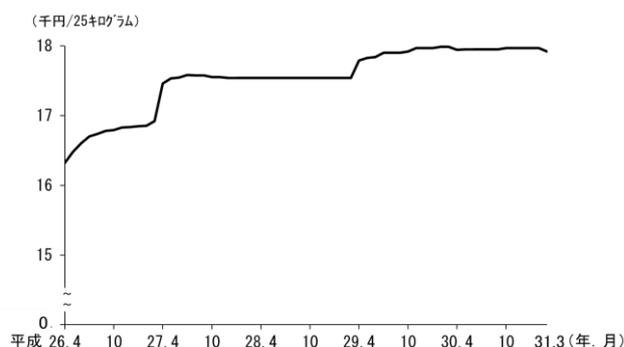
図6 脱脂粉乳の民間期末在庫量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、（独）農畜産業振興機構調べ

脱脂粉乳の大口需要者価格は、平成25年4月以降、おおむね横ばいで推移していたが、平成26年度は消費増税や乳価の引き上げなどから上昇傾向で推移した。平成27年4月は、乳価の引き上げなどから上昇し、その後、おおむね横ばいで推移してきた。また、平成29年度の4月の乳価の引き上げから上昇し、30年度は25キログラム当たり平均1万7952円（同0.2%高）となった（図7）。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」
注：消費税を含む。

◆バター

30年度の期末在庫量は3.6%減、大口需要者価格は1.1%高

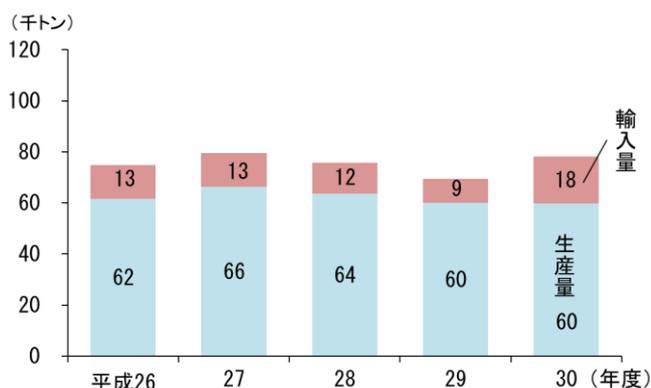
平成30年度のバターの生産量は、脱脂粉乳と同様に、脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量が減少したことなどから、5万9827トン（前年度比0.3%減）とやや減少した。

同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、世界的な乳脂肪需要の高まりから国際相場が上昇していたものの、5月以降の国際価格の落ち着きやバター需要の高まりなどから、1万8093トン（同98.5%増）と大幅に増加した（図8）。

バターの大口需要者価格は、脱脂粉乳と同様、平成25年4月以降、おおむね横ばいで推移していたが、26年度は消費増税や乳価の引き上げなどから上昇傾向で推移した。平成27年4月は、乳価の引き上げなどから上昇し、その後、おおむね横ばいで推移したものの、平成29年度は4月の乳価の引き上げなどから上昇し、30年度も1キログラム当たり平均1389円（同1.1%高）とわずかに上昇した（図10）。

図10 バターの大口需要者価格

図8 バターの生産量・輸入量

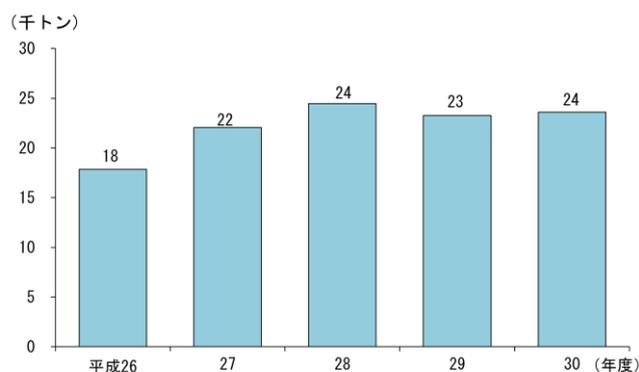


資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：輸入量は機構輸入分のみ。

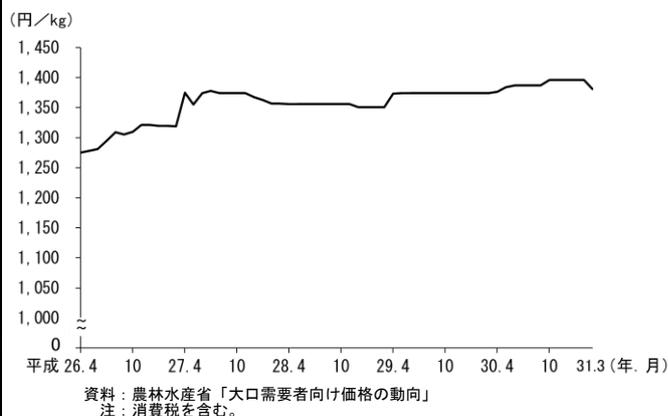
同年度の推定出回り量は、7万7902トン（同10.2%増）とかなりの程度増加した。

この結果、同年度の民間期末在庫量は、2万3625トン（同1.6%増）とわずかに増加した（図9）。

図9 バターの民間期末在庫量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、（独）農畜産業振興機構調べ



◆チーズ

30年度の総消費量、過去最高を更新

チーズの総消費量

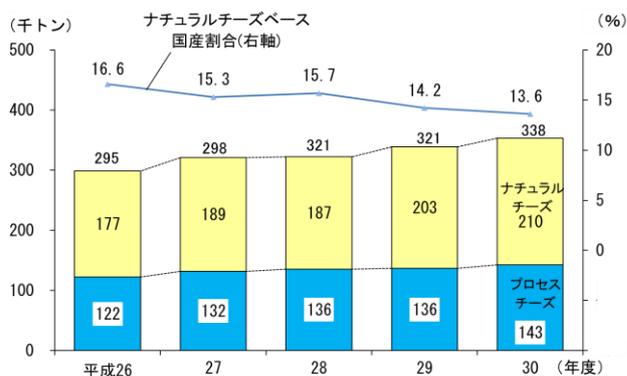
チーズの総消費量は、家庭消費や外食需要の増加などを背景に、増加傾向で推移している。

平成30年度のナチュラルチーズ消費量は、国産ナチュラルチーズ生産量が減少したものの、輸入量が大幅に増加したことから、21万367トン（前年度比3.8%増）とやや増加した。

プロセスチーズ消費量も、14万2563トン（同4.5%増）とやや増加した。

この結果、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は35万2930トン（同4.1%増）と増加した（図11）。

図11 チーズの総消費量と国産割合



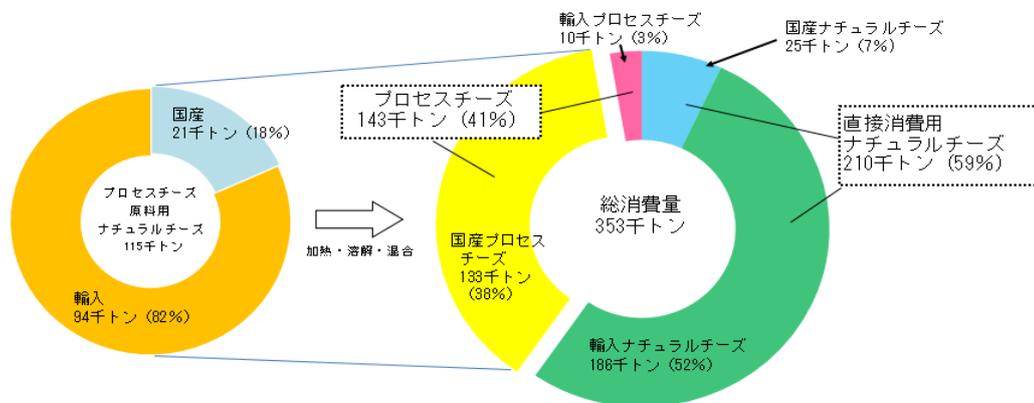
資料：農林水産省「チーズの需給表」

チーズ総消費量の内訳

平成30年度のチーズ総消費量に占める国産チーズの割合は、国内生産量が減少した一方、輸入が増加したことから13.6%（ナチュラルチーズベースに換算した場合の自給率）となり、前年度より0.6ポイント低下した。

また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズに占める国産の割合も、18.2%と前年度より1.7ポイント低下した（図12）。

図12 30年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省「チーズの需給表」

注1：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用されたもの。

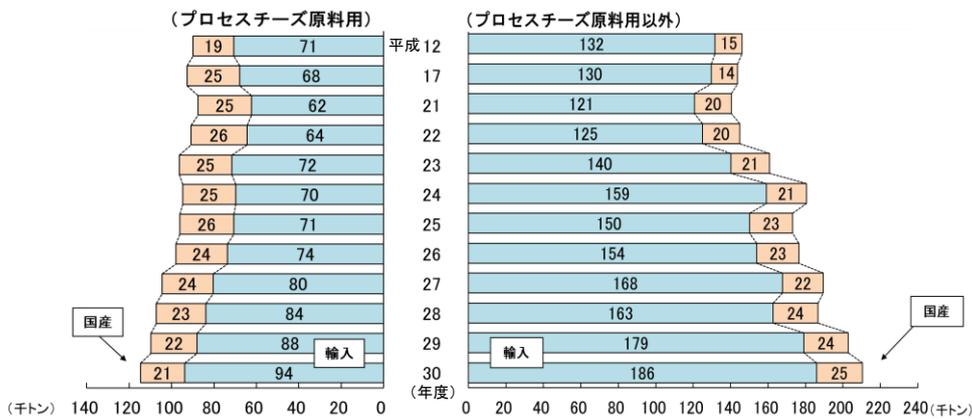
2：四捨五入の関係で、必ずしも合計値が文中の数字と一致しない。

チーズの生産量・輸入量

平成30年度のナチュラルチーズの輸入量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、27万9567トン(前年度比4.7%増)と増加した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用は9万3733トン(同6.6%増)、プロセスチーズ原料用以外は18万5834トン(同3.8%増)と、いずれもやや増加した(図13)。国産ナチュラルチーズの生産量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)

外)は、需要の増加を背景に増加基調で推移していたが、30年度は好調な牛乳需要を背景にチーズ向け生乳処理量が減少したことから、4万5384トン(同0.3%減)とわずかに減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が2万851トン(同4.3%減)とやや減少した一方、プロセスチーズ原料用以外が2万4533トン(同3.4%増)と増加した。

図13 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省「チーズの需給表」
注：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用された量。

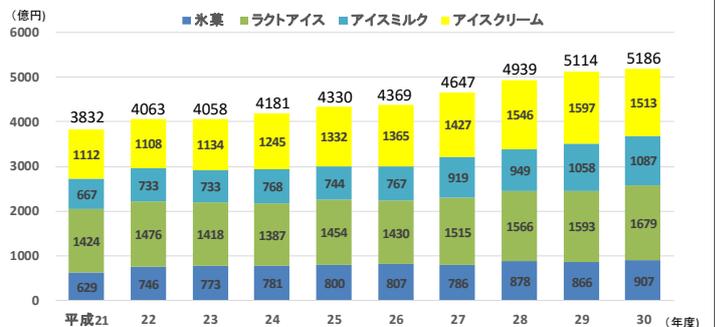
◆アイスクリーム

30年度の生産量、2.6%減

アイスクリーム市場規模は、7年連続で拡大傾向にある。種類別に見ると、夏の猛暑が影響し、比較的さっぱりとしたラクトアイス、氷菓、アイスマイルクの消費が伸びた(図14)。一方、脂肪率の高いアイスクリームの消費が伸び悩んだことから、30年度の国産アイスクリーム生産量は、14万5145キロリットル(前年度比2.6%減)とやや減少した。

同年度の輸入量は、8834キロリットル(同0.1%減)とほぼ前年度並みとなった。

図14 種類別アイスクリームの市場規模



資料：一般社団法人 日本アイスクリーム協会 (2018年度 アイスクリーム類及び氷菓 販売実績)
農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」
※輸入量は、1トン=1,455キロリットルで換算
一般社団法人 日本アイスクリーム協会 (2018年度 アイスクリーム類及び氷菓 販売実績)